

所報

題字: 武田満之校長(平成9年、野幌中学校)

第147号 令和元年 6月12日

江別市教育研究所所報

江別市高砂町24-6 Tel 381-1058

(主な内容)

- ・ 走り方教室
- ・ 「働き方改革」の講演から

「走り方教室」 12校で実施

山下りで自分の限界スピードを超えることに挑戦する対雁小の子どもたち(指導者は北翔大学・大宮准教授)



前傾姿勢のスタートダッシュに挑戦する東野幌小の子どもたち(指導者は野幌中・川村教諭)



腕振りを練習する野幌小の子どもたち(指導者～野幌中・浜崎教諭)



5月7日(火)から5月21日(火)にかけて、北翔大学の宮真一准教授や野幌中学校の川村龍彦・浜崎隆行両教諭のご協力を得て、主に小学校高学年を対象に「走り方教室」を開催しました。これは江別市と北翔大学が提携した「江別市体力向上事業」の取組の一つで、全国体力等調査結果でも江別市の小学生は走ることに課題があることから、正しい走り方や練習方法を学ぼうとするものです。

大宮准教授の指導は、遊びの要素を取り入れ、子どもたちが楽しく運動に取り組める内容に重点が置かれました。ジャンケンの結果によって走っていく目的地や練習内容を変える、2種類のスタートダッシュを経験させ感想を述べ合う、真っ直ぐな姿勢のつま先ジャンプで築山を上り、平地での限界スピードを超えた走りで築山を下るなど。一方、野幌中学校の川村・浜崎教諭は、中学校の陸上専門の教師らしく、直接的に速く走るためのポイントや練習方法を指導していました。腕の振り方やスキップ、ジャンプなど様々な身体の動かし方を体験させる、スタートダッシュや走るペース配分を変える練習など。

今年度は12校が実施し、どの小学校の子どもたちも意欲的に取り組んでいました。

「働き方改革」の講演から

去る4月の北海道立教育研究所連盟の研修会で、文科省の学校業務改善アドバイザーから「働き方改革」についての講話がありましたので、その概要をお知らせいたします。

1. なぜ「働き方改革」が必要か

- (1) 日本は労働生産性がOECDの平均以下であり、先進7カ国では常に最下位となっている。
- (2) ドイツ・オランダ・フランスなどと比較して、日本・韓国・ロシアなどは年間実労働時間が長い。
- (3) 多忙で自己研鑽の時間が取れない。ゆとりがないとこれからの変化には対応できない。
- (4) 一人当たりGDP、社会的支援、健康寿命、人生の選択の自由度、寛容度、ネガティブ感情の少なさなどの「幸福度」では日本は54位となっている。特に自由度と寛容度が低い。
- (5) これまでの働き方や学び方ではない、人生100年時代に合ったライフデザイン、キャリアプランが必要となり、新しい「働き方の設計」が求められ「生産性・活力・変身」がキーワードとなる。
- (6) 身体・精神や社会共同体との相互関係が満たされたウェルビーイング度が高いと仕事の生産性が向上する。働く人の幸福感と企業の業績との間に強い相関関係のあることが分かってきた。
- (7) 従業員の健康管理を経営的視点で考え、戦略的に取り組む「健康経営」という概念が注目されている。

2. 学校の働き方改革とは

- (1) この10年で労働時間は増加し、週60時間を超える状況となっている。月80時間残業はブラック。1カ月の時間外勤務が45時間を超えるか超えないかが見極めラインとなっている。
- (2) 書類探し、報告資料作成、会議時間が長引くなどの無駄をなくす。
- (3) 職員室の机や環境の整理は必須。①思考の整理ができなくなる②大切な書類を紛失するリスクが高い③急な欠勤の時に他の人が仕事を引き継げない、など片付かないことによる悪影響は甚大である。
- (4) 「量的質的に増える仕事」→「従来の働き方のままでは処理能力に限界がある」→「常態的に仕事が片付かずストレスがたまる」→「変化に対応できず、従来のやり方から抜けられない」の悪循環を絶ち、「量的質的に増える仕事」→「新しい働き方に挑戦できる柔軟な組織文化」→「働きがいと意欲、良好な人間関係からアイデアが生まれる」→「新しい働き方が定着し変化に強い組織になる」の好循環の流れに変える。
- (5) 長時間労働を削減する「量的」な問題だけでなく、非連携・重複などによる無駄を減らし、やるべきことに時間を振り分ける「質的」な変化をもたらす発想が大切となる。

3. 企業・行政・学校の事例

- (1) 「ご機嫌な職場」を目指し、社員同士が色々な関係性を築けるような空間を確保したオープンコミュニケーションの促進。
- (2) フリーアドレス制、個人席廃止、ペーパーレスオフィス、チーム型テーブルの導入などによる業務効率化・生産性向上のためのオフィス改革。
- (3) 校務分掌に「レイアウト委員会」を創設し、文書等の一元化や共有化が進んだ。
- (4) 「机周りチーム」「会議のやり方チーム」「改善チーム」の3つのプロジェクトを立ち上げた。
- (5) 書類や目的に合った情報、文房具の共有化により無駄や重複、非生産の時間をなくした。

4. 持続可能な学校づくりに向けて

- (1) 「分業・個人商店の集まり」の意識から「チームで協働・共創」へと意識と行動を変える。
- (2) 稼働効率の高い書類はクリアファイルで自由に持ち運び、稼働効率中ぐらいは共有スペースでファイリング、稼働効率の低い書類はPCデータで共有保存するなど、書類は使う頻度に応じて分類し置き場を変える。
- (3) 日常的な情報共有には、チームで協働、アイデア出し合い評価、カジュアルな情報交換、リラックスし気分転換と会話などが大切となる。
- (4) 成功のポイントは、①目的共有と課題設定②具体的な課題(テーマ)を掲げる③理念に沿った行動規範を示す④時間軸を決めて推進⑤マネジメント層の率先垂範⑥年代や職責を超えたスモールチームをつくる、などが考えられる。
- (5) ①現状を知る②改革の道筋をつくる③未来像「ありたい姿」を描くなど「働き方改革」のロードマップをつくり共有する。